広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	図書寮本『類聚名義抄』院政期点における漢音声調
Author(s)	佐々木, 勇
Citation	国語国文 , 75 (4) : 12 - 29
Issue Date	2006-04-25
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00025481
Right	Copyright (c) 2006 by Author
Relation	

図書寮本『類聚名義抄』院政期点における漢音声調

佐々木　勇

一、従来の研究と本稿の目的

図書寮本『類聚名義抄』は、院政時代一一〇〇年頃の書写・加点であると考えられている。[1]

この図書寮本『類聚名義抄』では、掲出漢字の漢音を注する方法に、次のものがある。

①反切注　②同音字注（「音与〇同」型を含む）　③「〇之去声」「〇上声」型の注　④掲出字・反切・同音字注への声点　⑤掲出字・反切・同音字注への仮名音注（いわゆる類音字表記の「火」を含める）

このうち、①反切注のほとんどは、中国の韻書・字書からの直接または間接引用であることが、本資料の出典注記から知られる。

また、②同音字注、およびこれに準じる③形式の注も、出典が示されているものはもとより、出典不明記のものも、「中国の規範にかなり忠実なもの」であることが明らかにされている。[2]

④のうち、掲出字声点については、詳細な検討が加えられている。その結果、平声・入声に軽重を区別する六声体系に基づく加点であり、かつ、大部分、『廣韻』の声調と一致することが明らかにされている。[3]

また、④⑤のうち、反切・同音字注の声点および声調表示を兼ねた仮名音注[4]から知られる声調も、「『廣韻』の声調にほとんどすべて一致している」、とされている。[5]

本稿では、まず、本資料に加点された朱声点および声調表示を兼ねた朱仮名音注の全体を調査し、先行研究で指摘された事柄が、本資料の全体に及ぶものか否かを確認する。その際、掲出字・反切上字・反切下字・同音字・その他、に分けて整理する。そして、それに基づいて、本資料の訓点から知られる漢音声調体系を導くことを目的とする。

さらに、掲出字・反切上字・反切下字・同音字における、それ

ぞれの加点の差を明らかにし、その差の原因を、背景にある漢音声調から説明することをも目指す。

なお、研究の性格上、複製本による調査では、不明な点が残る。そこで、原本によって、複製本では判然としない点を確認した。[6]

二、漢音を示す声点・仮名音注の種類および両者の関係

まず、本稿の対象となる、漢音を示す声点と仮名音注の種類、および両者の関係について述べる。

1．声点・仮名音注の種類と加点時期

掲出字への朱声点は、清濁を区別していないため、それを区別している注文の反切・和訓等の声点よりも早く加点された、とされている。さらに、掲出字声点には、大小の別があり、小さな声点は注文の和訓などへの声点と同時に加点されたものであろうことも言われている。たとえば、掲出字への唯一の濁声点加点例は、「罘（平）ー（網）（上濁）ノア（平）ミ（平）毟」（二九七7〈二九七頁7行目の意。以下同じ〉）の文選読みの例であって、和訓と同時に加点された別筆声点である、とされる。[7]

この点を原本について見ても、掲出字声点には大小があることが確認できた。

その大きな朱声点は、声調表示を兼ねた朱仮名および句頭・句切りの点と同筆であろう、と判断された。

一方、小さな朱声点は、和訓・反切・同音字注の声点と同一に見え、同時に加点されたものであろう、と思われた。

そして、単字掲出字には大きな声点が多く、異体字とともに記した正体字に加点された声点には小さなものが多い、といった傾向は見出せる。

しかし、それはおおよその傾向であり、大小の声点は完全には使い分けられていないし、大小の判定に迷う声点も少なくない。また、右の文選読みの掲出字に加点された声点も、他の掲出字声点と別筆とは認められなかった。

そもそも、和訓を連続させる文選読みでは漢語に濁声点を加点し、その他の掲出字には単声点のみを使用する加点を、同一人物が行なっても不思議なことではない。

濁声点を用いない声点と濁声点を用いる声点とを、掲出字と注文、および、意訳字と音訳字とで使い分けた音義として、唐招提寺蔵『孔雀経音義』院政初期点を挙げることができる。[8]

したがって、本資料における大小の声点は、書き分けの傾向は認められるものの、同時の加点であると判断する。よって、本稿

では、大小の声点を区別せず、一括して処理する。

また、漢音を示す朱仮名音注も、一筆であると見られる。ただし、「濁(ダク)(入)」(一六7)における「タク」のみは、別筆と判断される。[9]

2. 声点と仮名音注との関係

本資料の声点と声調表示を兼ねた仮名音注との関係については、仮名音注は、「声点と併記されているばあい、声調を考慮にいれずにかかれているが、そのほかのばあいには、「第6図」にしめすような体系で、そのしるされる位置によって、声調が同時にしめされるようなしくみになっている」という指摘がある[10]（「第6図」は、平声・入声に軽重を区別する六声体系の加点位置を示した図である）。

ただし、小松論文では、「声点とかな表記の字音とが併記されているもの　二九例」とし、そのうち八例を挙げるのみで、他例は省略されている。[11]

そこで、まず、本資料において、「声点とかな表記の字音とが併記されているもの」を抜き出してみた。すると、左の二三例を見出せた。[12]

以下、それを、加点字の位置によって分類して掲げる。（印刷の都合上、仮名音注はすべて右傍に、仮名に付されたLはその仮名の下に、記す。）

A. 掲出字に加点されたもの（一例）

罘(フ)(平)―(網)(上濁)ノア(平)ミ(平)巽（二九七7）

B. 反切上字に加点されたもの（無し）

C. 反切下字に加点されたもの（四例）

倶(ク)(平軽)（一〇五6）　逼(ヒョク)(入軽)（三一七1）　登(トウL)(平)（二五一2）　霤(リウ)(去)（一五7）

D. 同音字に加点されたもの（一五例）

狹(カウ)(入軽)（一一3）　棹(タク)(去)（一七1）　皤(ハ)(平軽)（一八4）　韜(タク)(平軽)（二七2）　些(セイ)(去)（四四2）　籠(ロウL)(平)（五二2）　庶(ショ)(去)（五三3）　狹(カウ)(上)（二九五5）　辱(ショク)(入軽濁)（三一〇7）　眇(ヘウ)(上濁)（三一七2）　弦(ケン)(平)（三二〇3）　邑(イフ)(入軽)（三三五4）　嫋(ナウ)(上濁)（三三五5）　辱(ショク)(入軽濁)（三四二1）

E. 上記以外の注文字に加点されたもの（三例）

濺(セン)(去)（一〇4）　訥(トツ)(入濁)（一六九4）　棄(タク)(入軽)（三四二4）

以上、声点と併記された仮名音注二三例は、いずれも声調を表示していない。これは、声点が加点されていない漢音の仮名音注が、原則として、声調表示を兼ねることと対照的である。

このように、本資料において、漢音を表示した朱声点と朱仮名

音注とには、強い相関がある。したがって、右の仮名音注と声点とは、同時に加点されたものであろうと思われる。[13]

三、声点

1．掲出字声点

図書寮本『類聚名義抄』の掲出字声点は、九十例の加点例について分析済みである。[14] 筆者も、全例について、それを確認した。よって、ここでは、原本調査の結果、新たに知られた点を付け加えるのみとする。[15]

A．小松著書には挙げられていないが、原本では声点が加点されている例。

（掲出字を単字形式にあらため、必要な音注のみを引用する。〈　〉内は、割注。以下同じ。）

a 愍愍（去）〈干云上通〉（二六九1）

b 磺（平）〈順云音黄（平）（以下、略）〉（一四八7）

右二例の声点は、いずれも紙端の虫損部分への加点であり、原本によってかろうじて確認できるものである。

aは、注文に音注を持たない例で、正字体に声点を加点する類に加えられる。

bは、注文の音注に声点加点し、なおかつ、掲出字に声点を加点した例である。当該例に声点加点が見られる理由は明らかでない。しかし、これに続く、「磺〈字書亦磺　公云廣　ア（上）ラ（上）カ（上）ネ（上）〉同鑛（上）」（一四九1）に対する正字体と判断しての声点加点であるとすれば、aと同類となる。[16]

B．複製本では声点のように見えるが、虫損である例。

帯（二八二7）〔小松著書四三七頁では、去声点加点例としている。〕

2．反切上字声点

掲出字以外に加点された、漢音声調を示す声点については、本資料の全体を調査した報告がなされていない。そこで、以下に、声点の全体を整理する。対象とするのは、呉音・和音を排除した、掲出字直下に続けて記される注文である。[17]

その中で、反切上字への声点加点は、全一三二例見られる。それを『廣韻』の声調清濁に対応させると、後掲表1となる。表1に見られるとおり、『廣韻』声調に原則として一致している。『廣韻』声調とずれが見られるのは、唯一、次の例である。

璞〈真云疋（入）角（入）反〉（一六七4）

表中では、『廣韻』平声全清としたが、「疋」字は、『廣韻』に上声全清山母および上声次濁疑母の音も掲載されている。しかし、入声に記載は無い。ただし、日本漢音では、古くから入声字

表1　図書寮本『類聚名義抄』反切上字声点

廣韻／点	平声				上声				去声				入声			
	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁
平	5	2	31	13												
平軽	35	6														
上					3	2		9								
去									1	1	1					
入軽													6	2		7
入	1													1	4	2

として認識されていたらしく、醍醐寺蔵『妙法蓮華経釈文』平安後期点に、「質（シイチ）（入軽）〈眞（平軽）疋（ヒツ）（入軽）反〉」（二五2）、久遠寺蔵『本朝文粋』鎌倉中期点にも「疋（ヒツ）—夫」（二71）の例が存する。

表1から平声軽点は、平声全清・次清字に限って加点されていることが知られる。そして、入声軽点は、全濁字以外の入声字に加点されている。

右から、本資料反切上字声点における平声・入声軽重の区別は、日本漢音声調と『廣韻』声調清濁との対応原則に合致している、と言える。

なお、全濁上声字には声点加点が存しないため、全濁上声の去声化については言及できない。[18]

3．反切下字声点

反切下字への声点加点例は、全八四七例である。

それらを、『廣韻』の声調清濁に対応させると、後掲表2となる。

表2から、反切下字声点も、『廣韻』声調に原則として一致していることが知られる。

ただし、反切上字声点と比べて、軽重の区別に、日本漢音声調と『廣韻』声調清濁との対応原則に合わないものの比率が高い。

表2　図書寮本『類聚名義抄』反切下字声点

廣韻／点	平声				上声				去声				入声			
	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁
平	47〈3〉	1	62〈3〉	93							1					
平軽	86〈2〉	2	2	4												
上	1		4		51〈2〉	7	20〈1〉	61〈1〉	3							
去					1		1		113〈9〉	4	22〈2〉	54〈2〉				
入軽													70〈1〉	8	11	64〈1〉
入													28〈1〉	1	16	8

下段の〈　〉内は、仮名音注による声調表示を同様に処理した数で、外数。

これは、軽重清濁を示す反切上字とは異なり、四声を示す反切下字には軽重を正確に示す必要はない、という意識の表われかと考えられる。[19]

また、反切上字と違い、『廣韻』の四声から外れる例も存する。

A. 全濁上声の去声化を反映した例

その中で、『廣韻』の全濁上声字に去声点が加点されたのは、次の例である。

壓油〈（略）東云（略）烏（平軽）簟（去）烏牒（入）六反〉（一二〇1）

「簟」は、『東宮切韻』から引用した別音五番目の反切下字である。この「簟」は、『廣韻』には上声以外には掲載されていない。天治本『新撰字鏡』に「田點反」（八5ウ）、箋注『倭名類聚抄』に「蒋魴切韻云、簟、〈徒玷反、上声之重、（以下略）〉」（六70オ）とあり、日本でも、上声字として認識されていたと考えられる。ただし、慧琳『一切経音義』には、「旦難反」（七九29）と去声字を反切下字とした例が存し、中国において去声化していたことが知られる。

よって、本資料の右例は、「全濁上声の去声化」の反映例である可能性がある。

先行研究では、本資料の反切字声点は、全濁上声の去声化を反映していない、とされていた。[20] それ故、一例とはいえ、重要な例である。

他に、『廣韻』声調から外れるものとして、以下の例がある。

B．掲出字声調と一致する声点を反切下字に加点した例

鄔〈応云於古(去)反〉（一七七7）

反切下字「古」は、『廣韻』上声全清模韻の字である。しかし、被注字「鄔」は、『廣韻』で去声にも掲載される。ここでは、その音を加点したのではないか、と解釈される。

次の例も、同様に解釈される（当該加点例を含む反切のみ記す）。

惔〈徒甘(上)反〉（二四一4）〔惔―上声全濁・去声全濁・平声全濁〕

C．加点理由不明の例

踣〈敷救(上)反〉（一一一6）〔踣―去声次清・入声全濁〕

意〈弘云於記(上)反〉（二三八1）〔意―去声全清〕　恚〈弘云於(平軽)睡(平)反〉（二五一5）〔恚―去声全清〕

右の反切下字「救」「記」「睡」および被注字「踣」「意」「恚」は、『廣韻』で去声に所属している。また、切韻逸文・『玉篇』・玄応『一切経音義』・慧琳『一切経音義』・希麟『続一切経音義』にも、加点された声点に合う注は無い。

よって、本資料における上声あるいは平声点の加点理由は、不明とするしかない。

4．同音字注声点

本資料の同音字注には、「公任卿」「公」と冠したものがあり、それが、公任『大般若経字抄』からの引用であることが明らかにされている。[21] そして、「公任卿」「公」とされた同音字注に加点された声点は、以下に若干例を掲げた如く、呉音声調と一致するものが多い。よって、この音注は、今回の対象から外した。

ただし、公任『大般若経字抄』からの引用中に、「正〇」として、正音をも引いた例が存する。その中で、本資料に声点が加点されているのは、次の例である。[22]

瑕〈公云音計(平)正河(平)〉（一六四2）　洟〈應云勅計(去)反（略）順云夷(平)（略）公任卿云音低(平)正弟(去)〉（三七2）　謔〈應云許虐(入軽濁)反（略）公云音逆(入濁)正虐(入軽濁)〉（八二7）　環〈公云音貫(去)　夕(平)マ(平)キ(上)　正還(平)〉（一六一4）

右のうち、「正〇」として引かれた音注への声点は、『廣韻』声調と一致する。

よって、この四例は、今回の対象とする。

この四例を含め、図書寮本『類聚名義抄』の同音字注に加点された、漢音声調を示すと考えられる声点は、全六九七例である。

この六九七例を、『廣韻』の声調清濁に対応させると、後掲表3となる。

表3に見られるとおり、本資料の声点加点は、『廣韻』声調と原則として一致している。

ただし、反切上字を整理した表1と比較すると、平声・入声の軽重の区別に異例が多い。また、表1・表2と比較して、『廣韻』声調から外れる例が多い。

以下、『廣韻』声調と異なる声点加点例について、検討する。

A. 全濁上声の去声化を反映した例

蹈撰〈音撰(去)(以下略)〉(三四三7)　〔「撰」は呉音平声〕

補繕〈類云善(去)音(以下略)〉(三一三2)

〔「善」は呉音平声濁〕

方|—〈磬〉〈順云俗音奉(去)強(平)〉(一五六7)

〔「奉」は呉音平声濁〕

桃|花—〈石〉〈此間音道(去)卦(上)尺(入)〉(一四七6)

〔「道」は呉音平声濁〕

右四字、「撰・善・奉・道」は、上声全濁字である。この四例の去声点加点例は、上声全濁字の去声化例であると判断される。[23]

表3　図書寮本『類聚名義抄』同音字注声点

廣韻／点	平声				上声				去声				入声			
	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁
平	36〈10〉	15〈4〉	108〈15〉	86〈10〉	1				〈1〉							
平軽	72〈18〉	7〈6〉	14〈3〉	2〈1〉			1									
上			1		39〈7〉	12〈1〉	12〈4〉	24〈2〉	1		1					
去		1			1		4		48〈21〉	8〈2〉	36〈4〉	26〈5〉				
入軽													40〈14〉	4〈1〉	8〈5〉	34〈3〉
入													16	5〈2〉	32〈2〉	4

下段の〈　〉内は、仮名音注による声調表示を同様に処理した数で、外数。

B．掲出字声調と一致する声点を同音字に加点した例

本資料の同音字注声点には、同音字注の『廣韻』声調とは異なる加点が存し、その中には、「注字本来の声調を無視して、母字の声調にもとづいて加点する」ものがある、とされている。[24]

具体例として、次の二例が挙げられている。

壊〈音恢（去）〉（二二三4）　塾〈音黠（去）〉（二一九4）

右の類例として、以下のものを指摘できる。（〔　〕内に、『広韻』の音を記す。）

濫〈音醎（上）〉（四六1）〔濫―上声全濁匣母銜韻・去声次濁来母談韻、醎―平声全濁匣母咸韻〕　諳〈音奄（平）〉（九七1）〔諳―平声、奄―上声〕　泫〈音炫（上）〉（三八2）〔泫―上声全濁、炫―去声〕

最後の掲出字「泫」の例は、本文同音字注が上声全濁字の去声化を反映した去声字で注したにもかかわらず、声点加点者が掲出字声調と一致する上声点を加点した例か、と思われる。

C．連音上の声調変化を反映したと考えられる例

桃花―（石）〈此間音道（去）卦（上）尺（入）〉（一四七6）

「卦」は、『廣韻』では去声にのみ掲載されている。それに、上声点が加点されている。

右は、『倭名類聚抄』からの引用例である。『倭名類聚抄』の「俗」「此間」を冠した音注は、掲出字の呉音形と声調とを、注字の漢音によって示す例が大部分であることが指摘されている。[25]

この例もそれにあたるとすると、掲出字「花」の呉音声調、去声または上声（法華経音義諸本に依る）を去声字「卦」で注した例ということになる。

ただし、平安後期以降の呉音には、連音上の声調変化が見られる。[26]「花」の上接字「桃」の呉音声調は、去声または上声である（親鸞『観無量壽経』の声点に依る）。よって、去声字「花」が続くと、「花」の調値は上声と同一となる。その調値を表示するために、「卦」に上声点を加点したのが、右の加点例であろう。

もっとも、これが『類聚名義抄』声点加点者の判断によるものか否かは、不明である。『類聚名義抄』の原撰者は、『倭名類聚抄』の声点を「証拠」としたであろうことが言われており、[27]『倭名類聚抄』十巻本の尊経閣文庫蔵明治時代写本には「此間音道（去）卦（上）尺（入）」（一10ウ）とある。したがって、この例は、『倭名類聚抄』訓点本の声点を移点したものかもしれない。

D．加点理由不明の例

壙〈音曠（上）〉（二一三3）

掲出字「壙」・同音字注「曠」とも、『廣韻』去声字である。ただし、「壙」は、慧琳『一切経音義』には、上声の反切例「廓廣

反」（三6）が存する。あるいは、これを同音字に加点したものであろうか。

溷（音混（平軽））（三四3）

掲出字「溷」は、『廣韻』去声字である。これに、上声全濁字の同音字注「混」を付している。「混」には、本資料内に、他に、「混（弘云古混（上）反）」（二六六1）がある。また、慧琳『一切経音義』でも、平声の音注しか見られない。よって、右例の平声軽点は、不審である。あるいは、声点加点者が当該例を、「昆」（『廣韻』平声全清字）と誤認したものかもしれない。

以上、今回対象とした同音字注に加点された声点は、原則として、『廣韻』の声調と一致する。

ただし、四例ながら、全濁上声の去声化例を指摘できた点は、重要である。

5、右以外の注文字声点

これまで取り上げた例以外の注文漢字に、漢音声調を示すかと思われる声点を直接加点した例に、次のものがある。[28]

一（セン）（濺）（去）（一〇4）〔去声全清〕

この声点も、『廣韻』声調に一致している。

四、声調表示を兼ねた仮名音注

図書寮本『類聚名義抄』における声調表示を兼ねた仮名音注には、すでに検討が加えられている。[29]

ここでは、それらを加点箇所別に掲げる。

1. 掲出字に加点された例

汎（ハム去）灑（サ上）（シ平軽）〈トソ（上）ソ（上）イ／テ　選〉（一〇6）

右は、小松著書五〇八頁にも〔図版1〕として掲げられている。

「汎」は、『廣韻』去声字で、仮名音注が示す声調は、これと一致する。

「灑」は、『廣韻』上声麻韻および去声寘韻字である。よって、右例で、上声の位置に書き込まれた「サ」は、上声麻韻の音を表示している。しかし、仮名音注「シ」が示す平声軽に一致する音が『廣韻』には掲載されていない。『集韻』でも同様である。ただし、『韻補』（古逸叢書所収遼寧省図書館蔵宋刻本に依る）には、「叶山宜切音詩」の注が有る。反切上字「山」は全清字、反切下字「宜」は平声字であり、同音字注「詩」は平声全清字である。右例で、平声軽の位置に書き込まれた「シ」は、この音を注したものかもしれない。

2．反切上字に加点された例

反切上字には、この音注が加点された例が無い。

3．反切下字に加点された例

反切下字への加点例は、次の三〇例である（表2の下段〈　〉内に、その数のみ記した。最後にまとめ、○を付した四例は、小松論文で採られていない例（〔　〕に当該字の『廣韻』声調・清濁と韻目（平声で代表させる）とを記した）。△を付したものは、声点の位置が小松の認定と異なる例。以下同様。）

彭（サム去）（一二6）　溜（リウ去）（一六3）　狡（カウ上）（四二4）　俱（ク平軽）（七四4）　迸（ヘイ去）（九二4）　幼（イウ去）（九三3）　蔭（イム去）（九四1）　細（セイ去）（九四3）　諫（カン去）（九六6）　歇（ケチ入軽）（九九4）　陸（リク入軽）（一〇七6）　鄧（トウ去）（一一七2）　茗（メイ上）（一二二2）　氏（シ上）（一三四1）　衫（サム平軽）（一四一5）　偃（エン上）（一四二3）　胡（コ平）（一七九3）　干（カン平軽）（一九四4）　絳（カウ去）（二四七7）　潰（クイ去）（二六五5）　亮（リヤウ去）（二八一2）　乙（イチ入軽）（二八一7）　于（ウ平軽）（三〇四2・三〇四3）　諫（カン去）（三四〇4）　△乖（クイ平）（二七三1）　○閉（ヘイ去）（九四2）〔去声全清斎韻〕　○銜（カム平）（一四二2）〔平声全濁銜韻〕　○皮（ヒ平）（二一四7）〔平声全濁支韻〕　○柯（カ平）（一四二7）〔平声全清歌韻〕

すでに指摘されているとおり、加点位置は、『廣韻』における該字の所属声調と一致している。

ただし、表2の下段〈　〉内に記した通り、『廣韻』平声全清字に平声重の位置への加点三例、平声軽の位置への加点二例、というのは、意味のある数かも知れない。声点と同じく、反切下字は反切上字に比して、軽重の区別を厳密には行なっていない。

4．同音字に加点された例

同音字注に加点された声調表示を兼ねた仮名音注は、左の全一二七例である。

奄（エム上）（一二6）　疏（ソ平）（三四2）　泄（エイ去）（三五6）　弗（フツ入）（四九4）　奏（ソウ去）（五一4）　貂（テウ平軽）（六七7・六八1）　娟（エン平軽）（六九4）　澗（カン去）（七一2）　迅（シン去）（七三3）　係（ケイ去）（七四3）　辞（ジ平）（七四5）　素（ソ去）（七五5）　弑（シ去）（七七4）　住（チユ去）（七八7）　垓（カイ平軽）（七九4）　沸（ヒ去）（八九2）　胃（イ去）（九〇4）　賛（サン去）（九六3）　怡（イ平軽）（九七4）　瑳（サ平軽）（一〇四2）　差（シ平軽）（一〇四3）　敲（カ上）ウ平軽）（一〇五5）　膚（フ平）（一〇五5）　舜（セイ去）（一〇七2）　沓（タフ入軽）（一〇八2）　鍾（ショウ平軽）（一〇九6）　條（テウ平）（一一一1）

鏘（サウ平軽）（一一一5）露（ロ去）（一一二1）疏（ソ平）（一一三7）辟（ヘキ入軽）（一一七6）擗（ヘキ入軽）（一一七7）積（セキ入軽）（一一八1）燮（セフ入軽）（一二一4）牒（テフ入軽）（一二一4）寶（トウ去）（一二八1）奇（キ平軽）（一三二4）疵（シ平）（一三二6）郊（ヒチ入軽）（一三四2）痔（チ上）（一三八5）歎（タン去）（一四〇2）婪（ラム平）（一四三1）陂（ヒ平）（一四八3）期（キ平）（一四八4）沙（サ平軽）（一五二2）擢（ラ上）（一五二7）摘（タク入軽）（一五四1）零（レイ平）（一六一5）干（カン平軽）（一六六5）燠（イク入軽）（一八〇1）店（テム平）（二〇二1）嶝（トウ上去）（二〇二1）筠（キン平）（二〇八3）辟（ヘキ入軽）（二一八1）時（シ平）（二一八3）墮（タ上）（二一八4）押（アフ入軽）（二二〇1）怡（イ平軽）（二二一6）否（ヒ上）（二二一7）紙（シ上）（二二五6）遲（チ平）（二二五6）警（ケイ上）（二二八4）胚（ハイ平軽）（二三二1）汗（カン去）（二四五7）萱（火ム平）（二四六5）奥（アウ去）（二六八3）是（シ上）（二七一4）叨（タウ平軽）（二七三7）希（キ平軽）（二七三7）戌（スキチ入軽）（二七四6）億（イク入軽）（二七四6）素（ソ去）（二七五5）渾（コン平）（二七七2）諦（テイ去）（二七七4）蔽（ヘイ去）（二七九4）慢（マン去）（二八〇1）握（アク入軽）（二八〇7）篦（ヘイ平）（二八一1）簾（レム平）（二八一1）維（ヰ平）（二八一3）飜（ハン平）（二八二3）揮（クキ平軽）（二八二7）亦（エキ入軽）（二八三2）白（ハク入軽）（二八三7）率（スキチ入軽）（二八四5）凡（ハム平）（二八四7）泛（ハム去）（二八四7）司（シ平軽）（二八七3）訴（ソ去）（二八九3）鉛（エン平）（二八九6）體（テイ上）（二九二7）淳（スキン平軽）（二九三3）遁（トン上）（二九四1）襄（シヤウ上平軽）（二九四3・二九四3）催（サイ平）（二九四4）積（シ去）（二九六5）剛（カウ上平軽）（二九七4）己（キ上）（二九七5）聟（セイ去）（二九八3）申（シン平軽）（二九九1）施（シ平軽）（三〇二4）銛（セン平）（三〇四7）淩（リヨウ上平）（三〇七7）温（ヲン平軽）（三〇八4）釃（シ上）（三一一1）宏（火ウ上平）（三一一2）蕋（スキ平軽）（三一一6）桓（火ン平）（三一八4）弗（フツ入軽）（三一八7）頡（ケチ入軽）（三一九1）屈（クツ入軽）（三一九5）輟（テイ去・テチ入軽）（三一九6）隈（ワイ平軽）（三二五5）依（イ平軽）（三二七1）愆（ケン平軽）（三三二5）徘（ハイ平）（三三四2）昆（コン平軽）（三三五7）○提（テイ平）（一三二6）〔平声全濁齋韻〕○摧（サイ平）（一四三3）〔平声全濁灰韻〕○圭（ケイ平軽）（三三九1）〔平声全清齋韻〕○咨（シ平軽）（七六1）〔平声全清脂韻〕○趾（シ上）（一三一3）〔上声全清之韻〕○漏（ロウ去）（二〇六7）〔去声次濁侯韻〕○

測（ソク入軽）（二五三4）〔入声次清蒸韻〕

以上、小松論文に、七例を加えたにすぎない。加えた七例も、他例同様、『廣韻』の声調に一致する（表3の下段〈　〉内に、その数のみ記した）。上声全濁字の五例も、すべて、上声の位置に仮名が加点されている。

5．右以外の注文字に加点された例

右と同様の形式で、全七例を掲げる。

淅（セキ入軽）（二七3）　瑯（ラウ上平）（一七四5）　邪（ヤ平）（一七四5）　埏（エン平軽）（二二九5）　惚（ナウ上去）（二六八3）　〇澄（タウ上平）（四五6）〔平声全濁庚韻〕　〇―（泓）（ワウ上平軽）（四五6）〔平声全清耕韻〕

小松著書五〇八頁で、判読不能として除外された「―（泓）」（四五6）への加点例は、平声軽の位置から「禾ウ」が左斜め下に記入されているものと見た。右の九例も、『廣韻』声調に一致する。

五、声点および声調表示を兼ねた仮名音注の加点箇所の偏りについて

これまで見てきた、声点および声調表示を兼ねた仮名音注の加点数を、加点箇所別に整理すると、次表となる。

	声点	声調表示を兼ねた仮名音注
掲出字	九一	三
反切上字	一三二	〇
反切下字	八四七	三〇
同音字	六九七	一二七
その他	一	七
計	一七六八	一六七

1．声点加点の偏り

図書寮本『類聚名義抄』は、掲出字に声点・仮名音注を加点することが希である。掲出字の音は、注文で示すことを原則としている。数少ない掲出字声点は、上声の全濁音字に集中しており、加点者は、特にその声調に注意を払ったことが明らかにされている。[30]

また、本資料の反切上字への声点加点数は、反切下字への加点数に比して、少ない。このことについて、小松英雄は、「わざわざ反切上字にまで声点をくわえなくとも、（略）利用者は軽重を判別できるのではないか」という見方に立っている。[31]

しかし、平安時代の字書は、図書寮本『類聚名義抄』よりも反

切上字への声点加点例が多く、改編本『類聚名義抄』では、図書寮本『類聚名義抄』よりも反切上字への声点は減少する。[32]

この事実は、前代の加点者よりも後代の加点者が軽重清濁に詳しかったことの反映、と見るべきではなく、軽重清濁の習得が次第に困難になったことの反映、と考えるべきであろう。

図書寮本『類聚名義抄』における反切上字への声点加点も、その流れの中に位置づけられる。

2、声調表示を兼ねた仮名音注加点の偏り

本資料全体では、声調表示を兼ねた仮名音注の加点数は、声点加点数の十分の一弱である。

それを踏まえて右表を見ると、声調表示を兼ねた仮名音注が、反切上字に皆無であることと、同音字に集中することとに注目される。

反切上字への仮名加点例は、次の一例のみである（小松著書五〇八頁に〔図版3〕として掲げられている）。

所都〈弘云旦胡（ヨ平）反〉（一七九3）

ただし、右の「タン」は、音形のみを表示し、声調を表示していない。

反切上字に、一例しか加点が見られないのは、被注字の「軽重清濁」を示す反切上字に、全音形と声調とを記す必要がない、と判断されたためであろう。反切上字の全音形および声調を記すことは、被注字の音形・声調を導く際の妨げとなる場合もある。

たとえば、右の「旦」は『廣韻』去声字であるから、「タン」を去声に加点したとする。その場合、日本漢音声調の六声体系において、去声は軽重を区別しないので、掲出字「都」（『廣韻』平声全清字）が軽声であることを示すことができない。

また、声点加点にも共通する問題として、反切上字の日本漢音声調における軽重を加点した場合、それが被注字の軽重と一致しない場合があることが挙げられる[33]（たとえば、被注字が平声次濁字であり、反切上字が入声次濁字である場合、被注字は重声、反切上字は軽声となる）。

一方、反切下字には、少ないながら、声調表示を兼ねた仮名音注加点例が見られる。これは、被注字の声調と韻の音形とを示す反切下字において、声調と音形とを同時に示すこの方式が有効であると判断されたためであろう。

しかし、この方式がもっとも有効であるのは、同音字注についてである。同音字注にこの音注を加点すれば、被注字の全音形を示すと同時に、声調をも示すことができる。この方式の加点が同音字注に集中するのは、そのためであろう。

右表で、「その他」とした九例も、先に具体例を掲げたとおり、すべて、注文字の全音形と声調とを、直接示した例である。

六、声点および声調表示を兼ねた仮名音注から知られる声調体系

1．掲出字の声調体系

先に、小修正を加えたが、掲出字声点に関する小松の検討結果に影響はない。

小松が注意した、上声重点と判断される声点加点例は、筆者の判定では、次の十五例である。

踐（一〇八3）　距（一一一7）　豎（一二九7）　峙（一三八5）　嶼（一四三6）　部（一七八6）　墮（一九七5）　限（二〇四3）　埀（二一八5）　坐（二二九3）　恃（二四〇6）　憤（二五一3）　幌（二八五3）　袒（三三三5）　被（三三四6）

右は、全例、全濁上声字である。全濁字以外の上声字に、やや下方の上声点が加点された例は、無い。

しかし、全濁上声字にも、他の上声字と同様の上声軽点が加点された例が存することも、小松の指摘の通りである。

この実態を、小松は、「「上声軽」と「上声重」とが、《上声toneme》を構成するふたつのallotonesであり、一方の「上声重」が、実現された抑揚において去声調と区別をもたなかったために、この字群に特に注意ぶかく加点されている」（小松著書四七八頁）、と解釈している。

右に挙げた以外の上声点加点例には、全濁字も一九例含まれている。その中には、注文に、『倭名類聚抄』の「上声之重」「上声重」を引用している左の例も有る。[34]

踝（一〇六6）　紵（三〇四4）

よって、掲出字声点加点者が、上声重を、声調体系の一つとして認識していたとは考えられない。小松説の通り、本資料の掲出字声点は、調値の上で六種を区別する声調体系を背景に加点された、と判断すべきであろう。[35]

2．掲出字以外の声調体系

掲出字以外の声点および声調表示を兼ねた仮名音注から知られる声調体系も、従来の研究で言われるとおり、[36]平声・入声に軽重を区別する六声体系であることが確認できた（表2・表3、参照）。

七、むすび

従来の研究においては、図書寮本『類聚名義抄』の訓点によっ

て表示された声調が、『廣韻』声調と一致することが強調されてきた。たとえば、上声全濁字の去声化例が調査範囲に存しなかったことから、「その声点が全体に韻書に基づいて加点された」とされていた。[37]

しかし、右に記したとおり、全体について調査してみると、反切下字に一例、同音字に四例の、全濁上声去声化例を指摘できた。

そして、本資料の訓点から知られる声調体系は、掲出字・注文とも、平声・入声に軽重を区別する六声体系であった。これは、日本漢音の声調体系として、もっとも一般的なものである。

かりに、本資料の加点が韻書・音義に基づく加点であるならば、『毛詩』平安中期点の四声体系や、『佛母大孔雀明王経』平安初期末点の十六声体系のように、正確に軽重を区別した加点がなされるはずである。[38]

ところが、本資料の軽重の区別は、そのような厳密なものではなかった。しかも、その軽重の表示は、反切上字と反切下字および同音字との間で、厳密度に差が存した。これは、『妙法蓮華経釈文』平安後期加点・『孔雀経音義』院政初期点においても、見られた現象であった。

反切上字に声調表示例が少ないことも、軽重が次第に区別されなくなる日本漢音声調史上に位置づけて、はじめて理解される。

したがって、本資料は、中国中古音の体系に添った規範的な声調表示がなされているものの、他の日本漢音資料とまったくかけ離れたものではない。

院政期における日本漢音の中で、中国における規範をもっとも強く反映した層の加点がなされた資料、として位置づけるべきである。

〈注〉

(1) 築島裕「国語史料としての図書寮本類聚名義抄」(『図書寮本類聚名義抄』〈一九六九年、勉誠社〉に所収。その後の復刊本にも再録)、参照。

(2) 小松英雄『日本声調史論考』(一九七一年、風間書院)第Ⅱ部第1章。

(3) 右注小松著書第Ⅱ部第2章。なお、上声字については、沼本克明『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』(一九八二年、武蔵野書院)第二部第五章、でも『廣韻』声調と一致することが確認されている。

(4) 注(2)小松著書第Ⅱ部第2章、参照。

(5) 注(2)小松著書、三七四頁。ただし、反切・同音字注声点は、上声点一三四例、去声点一九四例、であることが示されるのみ(四四〇頁)で、具体例は省略されている。なお、掲出字声点・朱仮名音注・水部反切字の『廣韻』上声字については、注(3)沼本著書第二部第五章、でも『廣韻』声調と一致することが確認されている。

(6) 宮内庁書陵部のご高配により、原本閲覧の機会を与えて頂いた。こ

ここに明記し、書陵部長およびお世話頂いた皆様に、改めて御礼申し上げます。

(7) 注(2)小松著書、四二〇・四八〇・四八一頁。

(8) この音義の原本閲覧の機会は、未だ得られていないが、カラー写真に依る限り、声点は一筆のようである。石塚晴通「唐招提寺蔵孔雀経音義」(『北大国語学講座二十周年記念　論輯　辞書・音義』(一九八八年、汲古書院)所収)にも、朱筆に複数のものが存するという指摘はない。

(9)「タ」の右上に朱点が有る。これは、濁点かも知れない。今は、指摘に留める。

(10) 注(2)小松著書、五二二頁。

(11) 注(2)小松著書、五〇八・五〇九頁。ただし、最後に挙げられた「測」(二五三4)で入声点と認定されたものは、虫損である。よって、本稿の検討からは除外する。なお、第三例の所在は〔五三3〕、第四例の同音字注は「濁」、に訂正すべきである。

(12) 注(2)小松著書の認定より、六例少ない。一例は、前注の「測」である。また、「槃(平)―■(紆)(平軽)トウ(平)ッ(平濁)ワ(上)ク(平)」(三〇四3)の「ウ」は墨筆であり、「濁(タク)(入)」(一六7)の「タク」は別筆と判断したため、除外した。残る三例は、見出せない。

(13) 注(2)小松著書五〇七頁および五二五頁にも同様の見解が述べられている。なお、これらの少数例に限って、声点と仮名音注とが併記されている理由は、つまびらかでない。ただし、この方式によって加点された例に、倶(平軽)(一〇五6)・狡(上)(一九五5)など、その声点加点位置に仮名を書き込むスペースが無いものが含まれることは、確かである。小松英雄は、これらの例が本資料はじめに集中することを指摘し、途中から「位置に意味をもたせる方式にきりかえられた」としている(注(2)著書五二五頁)。しかし、本文に記したとおり、この方式は、三〇〇頁以降にも初めと同程度の集中を見せる。

(14) 注(2)小松著書、第Ⅱ部第2章。

(15) 小松著書の誤植を指摘する。(誤)紆→(正)紆(三二五7)。

(16) 改編本『類聚名義抄』観智院本では、字体注は見られないものの、「磺礦」が見出し字に並記されている(法中二ウ8)。ただし、金部(僧上六四オ5)の「鑛」の注文では、「磺」「礦」をともに「正」としている。鎮国守国神社蔵本(下一四〇ウ5)でも同様である。

(17) 注(2)小松著書三七三・三七四頁において「第一群」と名付けられた音注である。ただし、後に述べる如く、同音字注においては、公任の正音をも対象とする。

(18) 反切上字に声点加点し、反切下字には加点しない例は、全体で三例でしかない。そこで、反切下字に声点加点が存する反切について、その反切上字の声調と声母とを調べてみた。その結果、『廣韻』上声字は、全清字九五例、次清字三二例、次濁字五九例、全濁字三五例であった(すべて延べ数)。反切上字として使用されている上声全濁字は比較的少ないが、次清字よりは多い。その全濁上声字に加点がないことには、何らかの意味があるのかも知れない。しかし、全体の声点加点例が少数であるため、ここでは、事実の指摘に留める。

(19) 醍醐寺蔵『妙法蓮華経釈文』平安後期点および唐招提寺蔵『孔雀経音義』院政初期点においても同様であった。佐々木勇「醍醐寺蔵『妙法蓮華経釈文』の声点加点について――前後半の相違と表紙見返中段記事の解釈――」(『訓点語と訓点資料』第一〇三輯、一九九九年九月)、同「唐招提寺蔵『孔雀経音義』院政期点の声調体系――反切を有する前半部分について――」(『国文学攷』第一六九号、二〇〇一年三月)、参照。

(20) 注(3)沼本著書では、水部に限っての調査であった。

(21) 渡辺修「図書寮蔵本類聚名義抄と石山寺蔵本大般若経字抄とについて」(『国語学』第十三・十四集、一九五三年十月)。

(22) 石山寺蔵『大般若経字抄』の対応箇所(〈正河〉音計(三オ5)、音

低／正弟（四ウ4）、〈正虐〉音逆（二二オ3）逆（二二ウ2）、〈正還〉貫（一八ウ5）には、声点が加点されていない。また、図書寮本『類聚名義抄』には、「公云音飢（ケ去）」（二七四1）のように、声調表示を兼ねた仮名音注が公任音にも付されている（以下、去声の位置に書かれたケの仮名を、（ケ去）と簡略に表記する）。この注音法は、石山寺蔵『大般若経字抄』には見られない。

よって、『大般若経字抄』から引用した音注への声点および仮名音注も、図書寮本『類聚名義抄』の加点者が新たに加点したものである、と考えられる。

なお、正音注に声点加点がない『大般若経字抄』からの引用例に、以下のものがある。

諠〈公云音官（去）正暄〉（八二2）瑩〈公云音永（平）（略）正菜〉（一六四4）隠〈公云音殷正引〉（二〇六3）

(23) 佐々木勇「古字書における反切・同音字注への声点加点について」（「訓点語と訓点資料」第一一五輯、二〇〇五年九月）、参照。
(24) 注（2）小松著書、四七〇頁。
(25) 江口泰生「『和名類聚抄』の「俗」音注」（「国語学」第一四一集、一九八五年六月）。
(26) 注（3）沼本著書、第一部第四章第二節、参照。
(27) 馬淵和夫『和名類聚抄古写本声点本　本文および索引』（一九七三年、風間書房）。
(28) その他、注末周辺の和音・呉音部分のものは採っていない。たとえば、二八八1に、「初学記云」として、「春秋」以下の書名に声点が加点されている。これらは、呉音声調を示していると判断して、対象から外した。
(29) 注（2）小松著書、第Ⅱ部第3章。
(30) 注（2）小松著書、第Ⅱ部第2章。
(31) 注（2）小松著書、一五三頁。
(32) 注（23）佐々木論文、参照。
(33) 注（19）佐々木第一論文、参照。
(34) 他に、「上声之重」の注文を持つ上声軽点加点例に、『廣韻』に清音でしか記載されない「紆」（三二五7）が有る。
(35) 平安後期加点の『妙法蓮華経釈文』においても、加点者の声調体系は六声であった、と考えられた（注（19）佐々木第一論文、参照）。平安後期以降、六声より多くの声調を区別する声調体系は、実際上、伝承されなかったのではなかろうか。
(36) 注（2）小松著書、四八〇頁。
(37) 注（3）沼本著書、一〇五七頁。
(38) 注（3）沼本著書、第二部第四章第五節・同第一節、参照。

（ささきいさむ・広島大学大学院教育学研究科助教授）